の体験野が中間的な関係の人々に出現し，家族に出現しなかった理由を推測すれば，家族は自身の水俣病を隠すべき世間ではなかったためと考えられた．

5 顕著な解体症状にバルプロ酸が有効であった分裂感情障害の一例

奈良 康・小泉暢大栄・本田 潤
高橋 誠・村竹 辰之・染矢 俊幸*
新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

分裂感情障害の治療は，抗躁薬，抗うつ薬，抗精神病薬を症状に応じて単剤又は，併用するのが一般的である．抑うつ型は双極型に比べ治療手段は少なく，双極型で有効な carbamazepine（CBZ）や valproate（VPA）の効果は低いとされる．今回我々は抑うつ型の分裂感情障害で出現した顕著な解体症状に対し VPA が有効であった一症例を経験したのでここに報告する．

症例は 60 歳の女性．X 年 2 月より，抑うつ症状，貧困・虚無妄想が出現し他医にて薬物療法を受けたが効果なく，5 月に当科入院となった．入院当初，精神病像を伴う大うつ病と診断され，高用量の paroxetine（60mg）により，抑うつ症状，妄想とも改善した．しかし，8 月中旬より多弁傾向，過干渉を伴う解体症状が出現し，さらに，抑うつ症状と妄想も再燃した．この解体症状に対して risperidone は無効であった．Risperidone を中止し，paroxetine のみで加療継続した結果，抑うつ症状，妄想，解体症状は改善した．11 月に再度，8 月のエピソードと同様の解体症状が生じたとき，VPA はこの解体症状を軽減し，増悪・寛解を繰り返す抑うつ症状と妄想を安定させることができた．

本症例の，多弁傾向で始まり，過干渉，感情の不安定を伴うエピソードには気分高揚や自我の肥大を伴わない為，これは躁病エピソードではなく，解体エピソードと考えるのが適切である．今回のエピソード中，精神分裂病の活動期又は，残遺期の症状が一貫して存在し，大部分の期間で大うつ病のエピソードも存在する．この為，分裂感情障害抑うつ型と診断した．本症例では，寛解期に突然解体症状が出現し，抑うつ症状と妄想の再燃につながるという特徴が見られた．

分裂感情障害の治療方針は先述の如く，抗躁薬，抗うつ薬，抗精神病薬が症状に応じて単剤又は，併用で用いられる．双極型では lithium が有効であり，単剤，又は抗精神病薬と併用される．抗躁作用のある CBZ や VPA も多く用いられる．最近は特に，VPA の使用頻度が高く，VPA の有用性を示す文献も多い．抑うつ型では，抗うつ薬，抗精神病薬を単剤又は，併用することが一般的とされるが，両者の併用の効果に対しては疑問視する説が多く，抗うつ薬単剤にも劣ると述べる研究報告もある．Lithium や VPA の効果は少なく，維持療法としても有効性は低いとされる．従来，VPA は双極型に有効であるが，本症例の解体症状にも有効であった．このことは，VPA が分裂感情障害の躁病エピソードだけでなく，抑うつ型の分裂感情障害にも有効であることを示唆しており，VPA は分裂感情障害そのものの治療に有効である可能性がある．

6 著明な脳室拡大を伴う精神分裂病の 1 例

宮本 忍・細木 俊宏・村竹 辰之
塩入 俊樹*・染矢 俊幸*
新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

著明な脳室拡大を伴う精神分裂病の症例を経験したので報告する．

【症例】35 歳，女性

【主訴】感情の不安定性，幻聴

【家族歴・既往歴】精神科的遺伝負因，周産期障害や脳炎，頭部外傷などの中枢神経疾患の既往なし．

【現病歴】高校卒業ごろより被注察感が出現し，X－2 年，34 歳時から注察妄想，考想伝播，思考化声，幻聴が出現．X－1 年 5 月，精神分裂病と